

美  
紗  
の  
会

た  
よ  
り

## 星逢う夜の顛末記

西松 布咏



七月七日。七夕の星逢う夜に突然、声を喪った。十一日に予定されている【美と味の調和・夏の料理と江戸唄】のために毎日稽古に動んでいた最中であつた。今回の会場は、来年三月に閉店される紀尾井町・福田家の座敷。日本文化の粋を極めた旅亭が次々と姿を消してゆく時節での演奏とあつて、いつにもまして演目や話の内容にも吟味を重ね取り組んでいた。タイトルも【文月や星逢う夜の】と題し七夕に寄せた女のひたむきな恋心の唄から始めようと思つた。過去にも公演前の声の不調は何度かあつたがその

度に必死に乗り越えて来たのだが、今回は「急性声帯浮腫」と診断され当日までに声が蘇るかどうか？医師もさじを投げた様子だつた。しかし引き受けた仕事を反古にするわけにはゆかないと毎朝起きると、もしかして奇跡が起きて声が戻っているかも…と何度も神に祈つた。しかし当日になつても声は戻らなかつた。こうなつたら出来る限り心を尽くして臨むしかない！と覚悟を決め、涼しげな夏のしつらいの整つたお座敷に広がる屏風のまん中に座る。それは振り下ろされる刀に首を差し出す武士のように真っ白な心境だつた。前弾きに続き【文月】を唄い始めたが、ふーみーつきが声にならない…必死に三味線の音をたどりながら何とか出る音階をたどつてオクターブを上げ下げしていると、やがて闇の世界に微かな灯りを求めて唄が浮遊していった。それはまるで宇宙遊泳しているような初めて体感した不思議な時間であつた。さぞお客様にとつては不快な時間であつたに違いないと心の不調を心からお詫びした。歴史ある日本の美の結晶のなかで西松布咏の洗練された江戸唄を味わう時間だつたはずなのだから…。せめて声に出来ない音を引き寄せなければと今まで感じたことのない心の裏にわけいつた一瞬を生還忘れることはないだろうと思う。

どんなに時間をかけて技術を磨き難解な節付けを会得しても肝心の命である声を喪つては私の唄への思いは届かないのである。今まで何度も困難にぶつかると共に強い意志は岩をも動かす。努力は必ず実を結ぶ。だから一歩ずつ、少しづつ、とこの道を歩んで来たが声を喪つて改めて原点をおろそかにしてきた自分の心の未熟さを思い知つた。

そして毎日の繰り返し返しのなかで前向きな思ひばかりでなく経て来た時間の経過を静かに見据えてゆかなければならない年令になつて来たことを実感した。

何かを得ることは何かを喪うこと。そろそろ自己から発する思いを貫くことからゆつたりとした心で俯臥して物事を見るようにしてゆかなければと思ふ。最後の師であつた西松文一師の言葉を思い出す。「ようやく納得のゆく演奏が出来ようになつたと思つたらもう声が出ないんだから残酷なものだね。」去る五月十七日に神田明神の本殿で祝詞をあげていただき五名の新名取が誕生した。美紗の会の苗字である己紗は、それぞれに己を磨いて真摯に芸道を歩んで欲しいとの思いを込めて伝授させていただいたが、私こそ、己を見つめてより一層精進すべく、この顛末記をいつまでも記憶に留めて歩み続けたいと思ふ。



## 音を奏で唄を唄うこととは

今宮 陽子

想い事をしているときに三味線の糸を弾くと、自分の気持ちがかえってくる。最近、そんなことを感じるようになりました。今まで、楽器に触れることがなかった私にとって、はじめて内緒話をする相手に巡り会えたような。この音は人に聞かれなくても自分のためだけにある。そんなふうに思っています。少し意識が変わりました。



名取式その日はこれ以上ない早月晴れで、真つ青な空に神田明神の鳥居の朱が鮮やかなコントラストを生んでいました。おさらい会の時よりも厳かに着物を着こなした新名取となる鶴間さん、村本さん、高橋さん、相馬さんらが、宮司さま、巫女さま、お師匠に先導されて神田明神の本殿へ歩むと、参拝で境内に居合わせていた人たちも活気づきました。カメラを手にした私は、みなさんの姿を納めるため一緒に本殿に上がりました。昇殿した瞬間、外の五月のカンカン照りが嘘のようにヒヤリとした神聖な空気が、名取式には同伴者として気軽に訪れていた私にとって、恥ずかしながらそれが、神事であることへの緊張が走った瞬間でした。

古来ながらの装束をまとった巫女さまの舞があった後、宮司さまにより名取となるみなさんの新しいお名前が、鶴間茂登子こと己紗鶴鳴、村本かさねこと己紗詠花、福岡俊弘こと己紗俊詠、高橋幸治こと己紗詠治、相馬由紀子こと己紗秋詠と一人ずつ読み上げられる祝詞奏上の式。本殿に朗々と響く声は確かに神に捧げられたでしょう。その厳かな雰囲気、私はシャッターを切りながらも、おそれを強く感じていたのです。

神にもうひとつの自分の名前を告げ、認めてもらうとはどういうことでしょうか。三味線の音は自分の音、唄は自分の気持ち。私としてはそのように内へ内へと向かっていくはずの音楽が、天に晒され受け入れてもらえる。そんな時が来るのでしょうか。

本殿での神事が終わった後、明神会館でお免状渡しの儀式となる演奏が行なわれました。鶴間さん、秋詠さんの『高砂』、詠花さん、詠治さんの『白鷺』いずれも凛と張りつめた行き届いた演奏で、素晴らしいかったです。ようやく緊張の時を終えた新名取のみなさんと直会の席で語るうちに、みなそれぞれ



様々な事情で深い想いがあった、その気持ちを三味線、小唄に込めていることに気が付かされました。

和の音楽を始めたい。そんな軽はずみな気持ちで三年ほど前に美紗の会の門を叩いた私は、まだまだ新人気分が抜けず芸への理解が及んでいませんが、色々な想いが音になってすべてを含めて認めてもらえる。そして、天に届く。そう思うと、目の前が清らかになっていくようです。

式が全て終わった後、午後の強い日差しの中を散策し、神田明神傍らの『小唄塚』で足を止めました。石碑の影がくっきり。私はこれから、音を奏で唄を唄って行く中で、どんな影をつくっていくことができるでしょうか。

## 今、ここから

## 己紗 秋詠

布咏先生から、思いもかけない名取の話を受けたとき、初めはただただ驚愕した。布咏先生は実に丁寧に話してくださった。名取の意味、邦楽に対する先生の思い、芸に対する姿勢：恐らくは私だけでなく新名取となる弟子たちそれぞれに、かけるにふさわしい中身を考え抜き、「言葉を選んで話してくださったのだと思う。一つ一つの言葉は、とても温かく胸に沁みだ。「でも本当に良いのでしょうか」と確かめの言葉を口にせずにはいらなかったが。

恐れはあったが嬉しかった。布咏先生と、その創り出す世界は遙かな高みにあるが、「そこを目指して努力して良いんだよ」と許しをもらえたような気がした。

「名前、考えておいてね」と言われ、はたと困った。自分の名前を使おうとすると先輩方と同じ名前や同じ音になってしまう。では、と、好きな漢字や家族の名前を当てはめていき、秋の字に行き着いた。「秋」は育ててくれた祖母の名前。そして、久しぶりに祖母を思い出したとき、突然、祖母が唄の中の女たちに繋がって感じられた。

明治・大正・昭和、過酷な戦争の時期を生き抜き、趣味も持たず着飾ることもせず、着物にもんべ姿でひたすら働き続けた祖母。唄の中の美しい遊女と並べたら「何、はんかくさい(馬鹿馬鹿しい)こと言うてるがいね」と一笑に付されそう。

数年前、親戚の家から祖母の若い頃の葉書が見つかった。尋常小学校を卒業して奥能登の田舎から都会へ奉公に出る直前、親戚の叔父さんに書いた葉書だった。葉書には、家の状況を考え上の学校には行

かないと決めたこと、奉公先では仕事が終わったあと産婆になる勉強もさせてもらえることなどが生き生きと綴られ、後に残る弟たちのことをよろしくと締めくくられていた。健気な葉書だった。

唄の中に登場する女たちにとっても惹かれる。置かれる立場は様々だが、誰もが自分の人生を懸命に生きている。彼女たちに共通してあるのは、どんな人生であっても引き受ける覚悟。かつて、この国にはそんな女たちが数多いのだらう。唄の後ろに、そんな名もない女たちを感じる。祖母もその一人。この年になっても何かある度にじたばた足掻いている私など、とても敵わない。

秋詠：祖母と、憧れてやまない布咏先生から一文ずつの名取名を頂いた。己の現状を考えると恥ず



かしくて名乗るのを躊躇うが、いつかはその名に相応しくなりたいと思う。

五月十七日、由緒ある神田明神で厳かにして心のもった名取式をして頂いた。決して通り一遍ではない祝詞をあげて下さった宮司様。作法の一つ一つを手取り足取り教えて下さった千壽文先生。忙しいなか駆けつけ祝ってく下さった朋詠会長、忠詠さん、加藤さん、草詠さん。暑い中写真を撮り続けてくれた今宮さん、そして、誰よりも心を砕き当日まで膨大な準備をして私たちを栄えある場に立たせて下さった布咏先生。皆様に深く感謝します。

また私をこの場に連れてきてくれた人たちが、「何棹もあるから邦楽好きのあなたにあげるよ」と三味線をくれたNさん。先生を探していたとき「僕、端唄のお師匠さんの追っかけをしてるんだ」と布咏先生のリサイクルに誘ってくれた三好さん。そして三好さんに布咏先生を紹介した幸詠さん：誰が欠けても私はここにいない。人の出会いの不思議さも思う。出会った人たちに感謝しつつ、今ようやくスタート地点に立たせてもらったと肝に銘じ精進していきたいと思う。

# 四谷KAIDAN

紀尾井町福田家 盃南榮

昨日までの梅雨空が一夜にして真夏の青天と転じた七月十一日、紀尾井町福田家にて「夏の料理と西松布味の江戸唄―文月や星逢う夜の」と題し演奏会が開催された。ピルの一角とは思えない福田家の路地に誘われ非日常の世界は拡がった。

演奏会場である座敷は正面の六曲屏風、一面の襖、一帳の簾などなど、其処かしこに置かれている道具、調度品の総べてが夏仕立てに整えられている。場慣れない私は居心地の悪さを抱えたまま着席、いよいよ開演である。

文月や星逢う…(師匠の喉が壊れている)…軒を覗いた夫婦星。一曲終了。こんなに長かったか「文月」。予定は十曲、前半は短めな唄だが後半は長がくい「勝名のり」、端唄「あじさい」など。しかし途中気が付いた、なんと唄の方が師匠の声に寄り添っているではないかーと心がやや軽くなり、やがて終曲の上方唄「星逢う夜」。文月や星逢う夜を羨みて、残る思いの蜚り来りやしゃんせひと時雨。

いわく言い難く長い一時間でした。帰る道すがら立ち寄ったとある茶房で、斎藤氏が山歩きの極意についてお話をくださった。「山登りで一番難しいのは座のぼりの類ではなく、上手く歩みを進めるつまり歩くことなんです。」

日頃の心構えと鍛錬が何時でも何処でも、かぎりなく大切な積み重ねなのだろうーなどと感じ入っている。と突然先ほどの師匠の演奏がよみがえると同時に今後の演奏活動の新境地が開けてゆくのがみえてきたのだ(因みに私はマネージャーではありませんが…)。音のないところから音が聴こえてくる。動くはず

のない紙面が動き出す。魂の響きとは、創る側と受け取る側その真ん中の深いところで響きあうのではないか…、広大な地下水脈を探し求め、掘り、其処から水をくみあげる果てしもない作業なしには深い魂と出会うことはできない。日々の鍛錬と心構えとはそのような繰り返しを延々と弛まずすることなのだ。

「文」は人型の文身の事ですが、現代ではあまりなじみがありません。真ん中にあるハートがポイントです。身体の心臓と靈魂のシンボルとしての心との深い交わり、文月と重ね合わせこの文字を選びました。

## 後日談

あの日のお客人より「あの素晴らしい普通の演奏をもう一度」とリクエストが多数あったそうです。今後のリベンジの会を期待致します。

なお、斎藤氏は八月末頃座だらけの魔の山マッタイホールへお出かけだそうです。洗練された歩きでご無事にお帰りください。

怪談が快談かあるいは深い場所へと降りてゆく階段なのか…楽しい四谷KAIDANでした。



## 《今後の予定》

- ◎八月二十三日(日)三時より  
軽井沢 鶴間邸  
第七回 初代会
- ◎十一月二十九日(日)十二時より  
東京プリンスホテル プロビデンスホール  
第五十四回 美紗の会のつどい  
第五十回記念演奏会と祝賀パーティー



## ■たより第81号

発行者 美紗の会  
編集責任者 大久保 朋子  
デザイン 近藤 幹則

## ■美紗の会

主宰 西松 布味  
稽古場 港区白金台三、二、二  
白金台ブレイス三階  
電話 (三四四一)二七二六  
(五四四七)二四二二  
E-mail: nfu@soleil.ocn.ne.jp  
URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misas